

# 看護技術習得過程における段取りシート導入の試み

—実習における活用状況からの分析—

Experiment of Introduction of an Arrangements Sheet  
in Process to Learn the Nursing Technique

— Analysis of Outcome of Using an Arrangements Sheet at Clinical Practice —

佐々木 美 樹  
Miki SASAKI

富 田 幸 江  
Sachie TOMITA

## 要旨

看護系短期大学3年生（1年次に洗髪演習時に段取りシートを作成した者であり、領域別実習を全課程の3から4割を終了している）24名に、学内にて「段取りシート」を活用し、段取りをとるといふ考え方を技術習得過程に行ってきたことが、その後、実習において患者への技術提供時の考え方に活用できているかを調査した。

本研究の結果から、学内での基礎看護技術において段取りシートを用い、段取りをとるといふ思考過程を技術習得時の過程に用いたことは、学生が看護技術を習得していく上で、有効であるといふ示唆を得ることができた。

1. 実習中の患者への看護技術提供時に段取りをとりながらすすめるといふ考え方を思い起こした学生は約8割であった。思い起こした場面としては、安全・安楽な技術を提供するための根拠をおさえた場面が約4割、技術を提供するための手順を考えた場面が約3割、看護技術の具体的な方法を考える場面が約2割であった。
2. 実習で段取りシートが活かされたとした学生は約9割であった。その活かされた状況としては、学内で記入した段取りシートにより技術の手順が頭に入っていたとするが約3割、意味づけやポイントが押さえられ、看護技術の方法に活かされていたが3割であった。
3. 患者に看護を提供していく上で、段取りをとるといふ考え方をもとに技術提供していくことが必要であるといふほぼ全員の学生が感じていた。必要である理由は、安全・安楽などスムーズな援助を実施するため約4割、個別への援助を実施するため、技術の基本的な理解や方法論を明確化するため、それぞれ約2割であった。

キーワード：基礎看護技術 看護技術習得 段取り力 段取りシート 実習

### I. はじめに

看護学生の看護技術習得において、手順を中心に技術を習得してしまえば、学生の主体性、問題解決能力、創造力を生かす機会を逸し、患者への個別を配慮した看護技術（以下技術）を修得できないと考える。

そこで、本学の基礎看護学技術演習において、学生が手順に終始することなく、技術練習時に手順をイメージできながらも、自分はどういう視点でどのような根拠を持ち、安全で安楽な技術を提供できるのかを考え、学生が基礎看護技術の習得過程を踏めることを検討してきた。

そのひとつの方法として、齊藤<sup>2)</sup>が提案した「段取り力」を技術の演習方法に取り入れてきた。具体的な使い方としては、「段取り力」を高めるための一つのツールである技術の意味づけなどが意識化できる「段取りシート」を研究者らが作成し、洗髪技術習得過程において活用してきた。その成果については、学生が技術の手順に限らず、技術を行う根拠など、意味づけの視点が増えてきたといふ結果を得ている。<sup>2)3)</sup>

今回、学生が学内で、「段取りシート」を活用し、段取りをとるという考え方で看護技術習得過程を踏んだことが、その後、看護領域実習（以下、実習）において、患者への看護技術提供時に活用できているかを明らかにしたので報告する。

## Ⅱ. 研究目的

基礎看護学における基礎看護技術の習得過程において「段取りシート」を導入したことが、その後の実習において、患者への看護技術提供時に活用できたかを明らかにする。

## Ⅲ. 本研究における用語の定義

### 1. 段取り力<sup>9)</sup>

全体を通してみる予測力であり、今何のために、これをやっているかが明らかになっている状態。さらに、物事を見るとき、「段取りをとる」という視点を導入すれば、見えてくるものがたくさんある。それが経験知となって積み重なってくる。経験知は視点がクリアであるので、あたかも整理された箱のように、たくさんの経験が積み重なっていくことができる。その視点でいいものをたくさんみると、自分への取り込みが早くなる。段取りを組むためには経験知が重なっていかなければならない。経験知はどうやったら積み重ねることができるのかといえば、物事見るときに、「段取り力」という視点を入れることによって得られる。

### 2. 段取りシート

段取り力を高めるひとつの方法として、すなわち、物事を進めるとき、どういう角度で、どのような方法で、何に向かうのか、その視点で、その流れを書き示していくための用紙（図1）である。このシートは、斉藤が作成した「デザインシート」<sup>9)</sup>の一部を改編し、研究者らが「段取りシート」とした。

## Ⅳ. 研究方法

### 1. 対象

看護系短期大学3年生24名（1年次に洗髪演習時に段取りシートを作成した者）

### 2. 調査時期

2006年6月（領域別実習を全課程の3から4割を終了）

### 3. 調査内容

以下調査内容1)～3)に対し、4段階尺度で回答を求め、各項目において選択理由を自由記述式で求めた。

調査内容1) 実習中の患者への看護技術提供時、段取りをとりながらすすめるという考え方を思い起こすことがあったか。

1. 床上における洗髪の手順をトレースし、洗髪を実施する段階として、大切なポイントや流れをメモしていただき、自分が次に実施できるようにポイントを書き

実施することのポイント(手順)	根拠(意味づけ)
(1) 患者に飲めない液体を除去カマシビンとする。(非経口摂取)	準備物 ・スエーデン：1：70℃の水 ・バスタブ：約80℃湯(85℃) 室温調整して、→蒸気熱による熱伝導を考慮する。蒸気の熱は伝わりやすいから、室温よりも高温の水を使う。
(2) 作業環境を整える ① 床頭台、作業台を準備する。蒸気熱による熱伝導を考慮する。蒸気の熱は伝わりやすいから、室温よりも高温の水を使う。 ② ベッドを上げる。蒸気熱による熱伝導を考慮する。蒸気の熱は伝わりやすいから、室温よりも高温の水を使う。 ③ 使用物品を70℃で消毒しておく。 (4) 患者と安全で洗髪し、髪を整えながら行う。 ① 両手を洗ってカマシビンに水を注ぎ、患者の顔を覆う。 ② 両手を洗ってカマシビンに水を注ぎ、患者の顔を覆う。 ③ 洗髪の際、患者の顔を覆う。 ④ 髪を濡らす(70℃の水を使う)。(10分以内)	水着や髪に液体が入ると、皮膚が乾燥しやすくなる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。
(3) 洗髪の手順 ① 髪を濡らす(70℃の水を使う)。(10分以内) ② 髪をすすぐ(30℃の水を使う)。(10分以内) ③ 髪を乾かす(30℃の水を使う)。(10分以内) ④ 髪を整える(30℃の水を使う)。(10分以内)	蒸気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。
(4) 洗髪の手順 ① 髪を濡らす(70℃の水を使う)。(10分以内) ② 髪をすすぐ(30℃の水を使う)。(10分以内) ③ 髪を乾かす(30℃の水を使う)。(10分以内) ④ 髪を整える(30℃の水を使う)。(10分以内)	蒸気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。
(5) 洗髪の手順 ① 髪を濡らす(70℃の水を使う)。(10分以内) ② 髪をすすぐ(30℃の水を使う)。(10分以内) ③ 髪を乾かす(30℃の水を使う)。(10分以内) ④ 髪を整える(30℃の水を使う)。(10分以内)	蒸気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。
(6) 洗髪の手順 ① 髪を濡らす(70℃の水を使う)。(10分以内) ② 髪をすすぐ(30℃の水を使う)。(10分以内) ③ 髪を乾かす(30℃の水を使う)。(10分以内) ④ 髪を整える(30℃の水を使う)。(10分以内)	蒸気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。

実施することのポイント(手順)	根拠(意味づけ)
(1) 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ② 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ③ 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ④ 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内)	蒸気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。
(2) 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ② 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ③ 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ④ 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内)	蒸気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。
(3) 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ② 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ③ 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ④ 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内)	蒸気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。
(4) 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ② 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ③ 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ④ 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内)	蒸気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。
(5) 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ② 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ③ 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ④ 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内)	蒸気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。
(6) 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ② 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ③ 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内) ④ 湯を注ぐ(70℃の水を使う)。(10分以内)	蒸気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。また、湯気が患者の顔を蒸らす原因となる。

図1 段取りシート例(学生が記入したもの)

調査内容2) 実習中の患者への看護技術提供時, 以前, 学内で段取りシートに記入したことが活かされたか。

調査内容3) 今後, 患者に看護を提供していく上で, 「段取りをとる」という考え方をもとに技術提供していくことが必要であると感じるか。

#### 4. データ分析方法

- 1) 調査内容において, 4段階尺度で回答を求めたものについては, 単純集計を行った。
- 2) 各項目における記述内容をコード化し, カテゴリー化することを研究者らで実施した。カテゴリー化の際, 内容の妥当性を高めるために, 十分な検討を重ねた。

#### 5. 対象者の背景

- 1) 1年次(後期)学内での洗髪技術習得における「段取りシート」の取りくみ状況
  - ①洗髪のデモンストレーション時, 重要と考えられた手順などの流れやそのポイントを学生自身が段取りシートに記入した。
  - ②段取りシートを活用し, 洗髪技術の自己練習を1週間行った。
  - ③教員による洗髪技術のチェックを受けた後, 段取りシートを再度記入した。
- 2) 段取りシート活用の効果と学生の捉え方
  - ①洗髪技術演習前後の技術への意味づけの視点が約3倍に増加した。
  - ②技術習得時に活用した段取りシートの必要性や段取りをとるという考え方については, ほぼ全員の学生が必要であると捉えていた。

#### 6. 倫理的配慮

学生に, 研究の趣旨, データの秘密厳守, 研究以外に使用しないこと, 研究同意の有無により成績には影響しないことを説明し, 同意を得た学生のみを対象とした。

### V. 結果

各調査内容において, 単純集計した結果は, 以下, 表1から3に示すとおりであった。

調査内容1) 「実習中の患者への技術提供時, 段取りをとりながらすすめるという考え方を思い起こすことがあったか」について, 思い起こすことが, 「あった」は24名中6名(25.0%), 「少しあった」は15名(62.5%)と約8割の者が実習中に思い起こしていた。「あまりなかった」は2名(8.3%), 「なかった」は1名(4.2%)であった(表1)。

「あった」「少しあった」とした21名が思い起こした場面について記述したものをコード化した結果, 31枚抽出できた(表2)。

その場面は, 「安全・安楽な技術を提供するために, 技術の根拠, 意味付け, 留意事項を押さえた場面」が13枚(41.9%), 「技術を提供するための手順を考えた場面」が9枚(29.0%), 「看護技術の具体的な方法を考える場面」が2枚, 「個別への配慮を考えた場面」が2枚であった。

表1 患者への技術提供時、段取りをとりながらすすめるという考え方を思い起こすことがあったか

N=24

	人数	%
あった	6	25.0
少しあった	15	62.5
あまりなかった	2	8.3
なかった	1	4.2
合計	24	100

表2 患者への技術提供時、段取りをとりながらすすめるという考え方を思い起こした場面

コード総数 31 枚=100% N=24

カテゴリー	コード	枚数 (%)
1. 安全・安楽な技術を提供するために、技術の根拠、意味付け、留意事項を押さえた場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どうすれば爽快感が得られるか、安全に行なえるのか</li> <li>・爪を切る前に、温めて爪をやわらかくしてからきる</li> <li>・気化熱を奪われるということを意識して保温につとめた</li> <li>・洗髪するときは湯加減を確かめるために毛先から濡らしていき、少しずつ頭皮に湯をかける</li> </ul>	13 (41.9%)
2. 技術を提供するための手順を考えた場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物品のセッティングや順番などを書いたことを思い出した</li> <li>・1年生で技術を習ったときのことを思い出しながら、拭く手順や気をつけなければいけないという注意点を思い出しながら順序だてて行なうことができた</li> </ul>	9 (29.0%)
3. 看護技術の具体的な方法を考える場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・耳に水が入らないような手の置きかたの実施をした</li> <li>・シャンプーは手の平でよく泡立ててから洗った</li> </ul>	5 (16.1%)
4. 技術の基本を活用していく場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的なことを活かしそれをどう活用するかが大切だと考えた時</li> <li>・清拭の援助をする際、患者のことを配慮し工夫活用ができた時</li> </ul>	2 (6.5%)
5. 個別への配慮を考えた場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が行なう技術に集中して、患者の個性をみていなかった時</li> </ul>	2 (6.5%)

調査内容2)「実習中の患者への技術提供時、以前、学内で段取りシートに記入したことが活かされたか」については、「あった」「少しあった」と回答した者21名に対し質問した。その結果、以前に作成した段取りシートが「活かされた」とした者は7名(33.3%)、「少し活かされた」とした者は13名(61.9%)と、9割以上活かされたという回答がみられた。「あまり活かされなかったとした」とした者は1名であった(表3)。

表3 患者への技術提供時、以前作成した段取りシートが活かされたか

N=21

	人数	%
活かされた	7	33.3
少し活かされた	13	61.9
あまり活かされなかった	1	4.8
活かされなかった	0	0
合計	21	100

表4 患者への技術提供時、以前作成した段取りシートが活かされたか

コード総数 18 枚=100% N=21

カテゴリー	コード	枚数 (%)
1. 学内での段取りシートを記入したことで、技術の手順が頭に入っていた	・手順が頭の中に残っていたので、あまり悩んだりすることなく実施できた ・洗髪の計画を立て手順を思い出しても、そのシートを見ることで、抜けている部分や注意点などを見直すことができた ・準備物や手順などをすばやく行なえた	6 (33.3%)
2. 技術を提供する際、ポイントが押さえられ、看護技術の方法に活かされた	・技術のポイントを意識したところが、頭から離れていなかった ・洗髪介助時手順を書いていたことで、頭にあり根拠をもって援助する事ができた ・清拭のやり方など行なう前に確認した ・洗髪時、頭の手のアて方、耳の押さえ方、頭の拭き方、ドライヤーの当て方など活かされた	6 (33.3%)
3. 段取りシートが印象に残っていた	・技術の流れなど、段取りシートを書いたことで、とても印象に残った ・以前段取りシートを書いたことを思い起こしながら、援助を行なうことができた	3 (16.7%)
4. 安全・安楽を考えられた	・患者に負担をかけず、準備物や手順などをすばやく行なえた	2 (11.1%)
5. 書くことで覚えられた	・手順を書いたことで覚えられた	1 ( 5.6%)

「活かされた」「少し活かされた」とした20名が、活かされたとする状況について記述したものをコード化した結果、17枚抽出できた（表4）。

その内容は、「学内での段取りシートを作成したことで、技術の手順が頭に入っていた」「技術を提供する際、ポイントが押さえられ、看護技術の方法に活かされた」が各6枚（33.3%）、「段取りシートが印象に残っていた」が3枚（16.7%）、「安全・安楽を考えられた」が2枚、「書くことで覚えられた」が1枚であった。

調査内容3）「今後、患者に看護を提供していく上で、『段取りをとる』という考え方をもとに、患者に技術提供していくことが必要であると感じるか」について、「必要である」は24名中23名（95.8%）であった。「少しある」は1名であった（表5）。

「必要である」「少しある」とした24名が理由について、記述したものをコード化した結果、29枚抽出できた（表6）。

その理由は、「患者への安全・安楽性などスムーズな援助を実施するために必要」が12枚（41.4%）、「個別への援助を実施するために必要」、「技術の基本的な理解や方法論を明確化するために必要」が各5枚（17.2%）、「書くことによりケアに対するイメージを持つことができる」が4枚（13.8%）、「ケア時間の短縮に必要」が3枚（10.3%）であった。

表5 患者への技術提供時に段取りをとると  
いう考え方が必要であると感じるか

N=24

	人数	%
ある	23	95.8
少しある	1	4.2
あまりない	0	0
ない	0	0
合計	24	100

表6 患者への技術提供時に段取りをとるとい考え方が必要である理由

		コード総数 29 枚=100%	N=24
カテゴリー	コード	枚数 (%)	
1. 患者への安全・安楽性などスムーズな援助を実施するため	<ul style="list-style-type: none"> <li>・段取りがないと途中でどうしてよいか戸惑いそうで患者にとって良い援助ができないと考える</li> <li>・段取りを取らないで行なうともたついてしまい、患者に不快感を与えてしまう</li> <li>・患者さんに気持ちよく援助を受けてもらうためには、頭の中で段取りをイメージしながら行なったほうがスムーズにできる</li> <li>・段取りをとるとい考え方は技術を提供していく上で、患者のことを考え安全・安楽に実施するうえで、大切だと思った</li> </ul>	12	(41.4%)
2. 個別への援助を実施するため	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すべてがすべての患者さんにあっているかというそうではなく、個性を考えていくことが必要であるが、その前の段階で段取りは必要である</li> <li>・きちんとケアを行なう前に、段取りを考えながら、ケアのシュミレーションをして、患者さんひとり一人が違うので、その人に合った方法を考える必要があると考える</li> </ul>	5	(17.2%)
3. 技術の基本的な理解や方法論を明確化するため	<ul style="list-style-type: none"> <li>・段取りが頭に入ると基本的なことが理解できているので動きやすい</li> <li>・段取りが頭に入っていると、わからなくなっても確認できる</li> <li>・段取りをとるといことは最低限の基礎でもあるため、最初に知識を得ていないと、実習にでたら患者さんに迷惑がかかると思った</li> <li>・なぜその段取りで、根拠が必要なのか自分で振り返ることができる</li> </ul>	5	(17.2%)
4. 書くことによりケアに対するイメージを持つため	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安全や安楽を考えたら手順や根拠は大切と思うし、書くことでより身につく段取りシートにより技術の流れやイメージを考えながら行なうことは大切なことだから</li> <li>・段取りシートを書くことによって忘れていたことを思い起こし再確認することができる。</li> </ul>	4	(13.8%)
5. ケア時間の短縮のため	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者さんに段取りシートを使ってできる限り、短時間に技術を提供することができるように段取りシートを作って頭に置いておくことが大切だと思った</li> </ul>	3	(10.3%)

## VII. 考察

### 1. 患者への看護技術提供時、段取ることを考える意味

実習において患者への技術提供時に、段取りをとりながらすすめるという考え方を、約9割の学生が思い起こしていた。そして、段取りをとるとい考え方を思い起こした学生のうち、約9割の者は、学内で経験した段取りシートが活かされたと回答していることが明らかになった。

学生が段取りをとるとい考えを思い起こしたことは、学生が段取るという思考過程を患者への技術提供時に行っていると捉えることができる。段取り力とは、今何のために、これをやっているのかということが明らかになっている状態であり、全体を通してみる予測力である<sup>9)</sup>。学生は、実習時、患者に合ったよりよい看護を提供する際に、患者がよりよく入院生活を過ごすための看護の目標を明らかにし、患者に技術提供を行っていることが伺える。

技術提供時に段取りをとりながらすすめるという考えを思い起こした場面からみると、学生は「安全・安楽な技術を提供するために、技術の根拠、意味付け、留意事項を押さえた場面」「技術の基本を活用していく場面」をあげている。日本看護科学<sup>7)</sup>の看護技術の用語定義では、「看護技術とは、看護の専門的知識にもとづいて、対象の安全・安楽・自立をめざした目的意識的な直接行為であり、実施者の看護観と技術の修得レベルを反映する」と定義していることから、学生も、専門知識に基づいて、対象への安全・安楽・自立を目指す技術の提供のあり方を捉えていたことが読み取れる。これは、看護を提供する者として、今何のために、これをやっているのかという目的意識を持った看護行為につながっていると考える。また、学生は、段取るという考え方を思い起こした場面として、「技術を提供するための手順を考えた場面」をあげている。斉藤は、「や



はり段取りは、やる前に頭の中でいちおうその手順を組み立てておくものである」とし、マニュアル人間は自分で手順を決めることができないと述べている<sup>9)</sup>。目標にたどりつくまでの手順を決めることができるのも段取りをとる力として必要なことであり、学生は段取りをとるという思考過程を踏む中で、患者に合った手順を考える力をつけていることがわかる。手順が良いことは、流れがよくなることから、技術の提供を受ける患者の安楽につながる重要な要素になるものと言える。

## 2. 患者への看護技術提供時、段取りシートを活用する意味

齊藤<sup>9)</sup>は、デザインシートに段取りを書くことについて、「段取りの本質は時間的なものだが、完成体は時間を吸い込んでしまったあとだから、それがどういう順番と優先順位で、どういうコンセプトからそうになっていたのかを逆に引きずり出す訓練は、頭を鍛える」と述べている。学内において、教員の洗髪のデモンストレーション後と、洗髪の技術の自己練習後に段取りシートを記入したことは、自分で見、実践するという経験の後に、記憶を思い起こしたことになる。患者への技術提供時に、段取りシートが活かされたとする状況のカテゴリーをみると、「学内での段取りシートを作成したことで、技術の手順が頭に入っていた」「意味づけができ、技術のポイントが押さえられた」「段取りシートが印象に残っていた」「看護技術の方法に活かした」であった。コード内容から、学生の実際の言葉をみると、『頭の中に残っていた』『頭から離れていなかった』『覚えられた』等の記述がみられた。このことから、学内で段取りシートを記入することは、段取りをとるという思考過程を作ることにつながり、齊藤がいう頭が鍛えられるということにつながっていると考える。また、阿部<sup>10)</sup>は「振り返りを通し、行為を『意味づけ』、修正し、やがてその行為が『自然』かつ『安定』したものとして展開されていく」と述べている。段取りシートを活用し、技術習得を行っていくことで、段取りをとるという思考過程が、後の実習における患者への技術提供時に活かされると考える。

三上<sup>11)</sup>は、看護技術に関する著書の中で、技術の手順と根拠という形式に技術内容を整理している。このことについて、著者は、「技術の実施内容は、看護の先輩諸氏が培ってきたこれまでの種々の技術をもとに再考し、現時点で明らかになっている知識、原理・原則、根拠・理由などを提示し、個々の看護学生やナースが、看護の対象に対して安全・安楽な看護技術を提供できるように、考えながら学習し習得できるように工夫した」とし、段取りシートと同様の形式をとり、先輩看護師の経験知が活かされた技術の内容を提示している。この点からも、学生が自らの経験を段取りシートにまとめなおし、技術の習得過程に役立てることは意味があり、段取りシートがひとつのツールとして活用していくことができることを再確認できる。

## 3. 段取りをとるという考えをもとに、患者に合った技術を実施していく意味

段取りをとるという考え方が実習での技術提供時に必要とした学生は、ほぼ全員であることが明らかになった。そして、なぜ必要であるかという理由に、『患者に気持ちよく援助をうけてもら

うため』『個別性を考えていくことが必要である』『ひとりひとりに合った方法を考える必要がある』『知識を得ていないと患者に迷惑をかける』があり、学生が段取りを取るという考え方が、単なる、Skill や Technique に終始することなく、患者のことを考え、安全・安楽、個別性を考えていく技術の捉え方に発展していることがうかがえる。齊藤<sup>12)</sup>は、「創造性と『段取り力』は矛盾し合うものではなく、むしろ「段取り力」があるほうが創造性が高まる」と述べている。そして、氏家<sup>13)</sup>は、現在の看護職者が行う看護行為を科学的なものとして認識しようとする立場から、「看護技術は人間愛に基づいて、科学的思考により、熟練した技で行う行為であり、その行為は常に創造性を発揮するものである」としている。段取りをとるという考えをもとに技術を提供することで、学生個々は、看護援助する際に、患者ひとりひとりに合った援助を創造的に考え、実施しようとしていることにつながると考える。

また、看護技術において、原理・原則をおさえ、つまり、ポイントや根拠をとらえ、その時、その場の状況で創意・工夫が必要になってくる。このことについては、金井<sup>14)</sup>は「三段重箱の発想（図2）」という考え方において、看護技術を創意・工夫をもって提供するにあたっては、まず、看護の視点・原理・本質をおさえ、対象の条件・状況に合わせて、方法・システムを考えていくことが、看護援助を提供する際の重要な考え方として示している。学生は、段取りをとるという考え方が、なぜ必要であるかという理由に、『基本的なことが理解できているので動きやすい』『根拠が必要なのか自分で振り返ることができる』をあげている。学生が、段取るという思考をもち、患者への技術提供を行うことで、原理・原則を抑えたうえで、患者に合ったよりよい、質の高い看護が提供できることにつながることができると考える。

段取りを組むため、そして、より段取り力を鍛えていくには、物事を見るときに、「段取り力」という視点をもちながら、いいものをたくさんみると、自分への取り込みが早くなる。そして、それが経験知となって積み重なってくるのである。このことは、学内における段取りシート活用前後の調査結果で、段取りをとるということを念頭に起き、演習に取り組むと、一つひとつの行為に意味づけされる視点が増えていたことと一致する。ゆえに、実習において、段取りをとるという考えをもとに看護に臨むことで、意味づける視点が増え、段取る力がついてくるものと考ええる。今後の看護技術を指導する際にも、「段取る」こと、つまり、目標を見据え、全体を通してみる予測力をもち、今何のためにそれをおこなっているのかを考えながら技術を行っていく大切

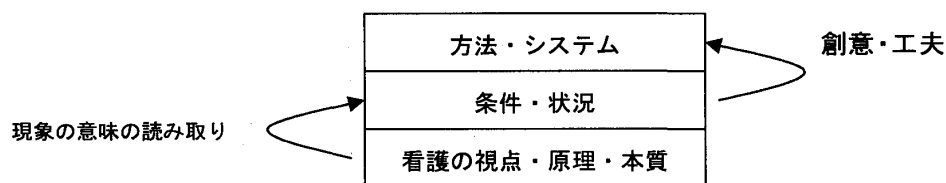


図2 三段重箱の発想

さを伝えていくことが必要だと考える。

## Ⅷ. 結論

1. 実習中の患者への看護技術提供時に段取りをとりながらすすめるという考え方を思い起こした学生は約8割であった。思い起こした場面としては、安全・安楽な技術を提供するための根拠をおさえた場面が約4割、技術を提供するための手順を考えた場面が約3割、看護技術の具体的な方法を考える場面が約2割であった。
2. 実習で段取りシートが活かされたとした学生は約9割であった。その活かされた状況としては、学内で記入した段取りシートにより技術の手順が頭に入っていたとするが約3割、意味づけやポイントが押さえられ、看護技術の方法に活かされていたが3割であった。
3. 患者に看護を提供していく上で、段取りをとるという考え方をもとに技術提供していくことが必要であるとほぼ全員の学生が感じていた。必要である理由は、安全・安楽などスムーズな援助を実施するためが約4割、個別への援助の実施、技術の基本的な理解や方法論を明確化するため、それぞれ約2割であった。

おわりに

今回の調査は、実習中の患者への技術提供時、段取りをとるという考え方の必要性や活用の状況について、明らかにすることができた。今後、学生が実習において、段取りを取りながら看護技術を患者に提供することにより、学生自身が技術に対して、根拠を持った技術を習得でき、それらが経験知となり積み重なっていくのか、また、技術提供に看護師として押さえなければならない重要キーワードである「安全」「安楽」「自立」を踏まえた技術習得に発展していくのか、明らかにしていきたいと考える。

## 〈引用文献〉

- 1) 齊藤孝：段取り力「うまくいく人は」ここがちがう，筑摩書房，p20-62，2003
- 2) 富田幸江，佐々木美樹：看護技術習得過程における「段取りシート」活用の意味—学生の技術演習前・後の段取りシート記入に関する意識調査を通して—，つくば国際短期大学紀要，33，p90-103，2005
- 3) 佐々木美樹，富田幸江：看護技術習得における段取りシートの活用の効果—学生の技術への意味づけからの分析—，日本看護技術学会 第4回学術集会講演抄録集，p103，2005
- 4) 前掲1) p20-62
- 5) 前掲1) p166-171
- 6) 前掲1) p20-62
- 7) 日本看護科学学会 看護学学術用語検討委員会，p9，1995

- 8) 前掲 1) p 33
- 9) 前掲 1) p 166
- 10) 阿部美和子, 藤岡完治他: 看護教育における「臨床知」の様相に関する一考察—現象学的アプローチに基づく参加観察法を通して—, 教師学研究, 2 (3), p 20, 2000
- 11) 三上れつ, 小松万喜子: 演習・実習に役立つ基礎看護技術, ヌーヴェルヒロカワ, 2003
- 12) 前掲 1) p 41
- 13) 氏家幸子, 阿曾洋子他: 基礎看護技術 I, 第 6 版, p vi, 2005
- 14) 金井一薫: 特別講演「看護の独自性と看護技術」, 平成10年度第 3 回教育研究会, 日本看護学校協議会

<参考文献>

- 1) 佐伯胖: 「わかり方」の探求, 小学館, 2004